

コロナ禍の緊急事態宣言発令時に幼・保の保育者は何に取り組んだか

話題提供者 山崎莉奈(板橋富士見幼稚園) 前田満那子(認可保育園こども芸術大学)

指定討論者 安見克夫(東京成徳短期大学) 杉山健人(鳴門教育大学附属幼稚園)

司会 大澤洋美(東京成徳短期大学) ○企画・話題提供 鍋島恵美(認可保育園こども芸術大学)

I 企画主旨

乳幼児保育は、保育を必要とする養育者の立場から幼稚園か保育園かともどもが受ける保育環境が選ばれる。今回のコロナ禍による緊急事態宣言は、両施設ともに予期せぬ事態に遭遇することになり、保育活動に支障をきたす状況下となった。保育園においても、可能な限り家庭保育の協力要請がだされ、在宅勤務体制がとられる社会情勢の中で開園するものの登園してくる児童の数も減少した。幼稚園では、就労の家庭の子どもは預かり保育を実施するものの学級での保育活動は休止となった。時が、新入園や進級するときと重なり、新たな環境に子どもおとなも共に信頼関係を結んでいく大事な時期であることから、まだ見ぬ子どもとの関係をいかに結ぶのか、離れていても家庭とは違う保育施設の今をどのように伝えていくのか、模索しつつの挑戦が始まった。

そこで今回は、その具体的な取り組みを幼保両者の立場の保育者から、また幼稚園での経験はあるものの保育園では初任である管理者(園長)から話題を提供し、さらに、緊急事態宣言が解除になってからの保育にどのような影響を及ぼしているのかを幼保両者の立場から考えたい。

緊急時であっても乳幼児が遊びに没頭する環境を乳幼児とともに創造するためには、どのような保育内容を計画し、安心安全な新しい生活様式を取り入れた実践をするのか、保育者の視点からの提言を試みたい。

II 話題提供

話題提供①

コロナ禍を生きる子どもたちの心に寄り添う

山崎 莉奈(板橋富士見幼稚園)

1) 緊急事態宣言発令までの教員の思い

2020年4月、いつ緊急事態宣言が出てもおかしくない状況の中でも、何とか園を継続したい、子どもたちが安心して遊ぶ存分遊べる場を作ってあげたい、そう願いながら教員で必死に子どもたちを迎える準備をしていた。しかし、その望みも叶わず入園式を目前に緊急事態宣言が発令され、先の見えない休園が決定した。緊急職員会議では、園生活を心待ちにしていた子どもたちに、今、出来る最善を尽くしたいという教員の思いが一致した。そこで、様々な案を出し合い「園での生活を想像し、期待をもつ」というねらいの基に動画配信を決めた。

2) 緊急事態宣言下の保育～動画配信～

子どもの目線で園内を巡ったり、季節の移ろいを感じられるように園庭にある桜や杏、池の鯉やカメの様子を紹介したりと、いつか訪れる園生活に期待が持てるような構成

を心がけた。製作セットや月刊誌を各家庭に郵送し、実際の保育と同じように子どもの興味を引き出しながら語り掛け、寄り添うことで、幼稚園や教師をより身近に感じられるような工夫をした。

3) 園再開における子どもの実態

6月に緊急事態宣言が解除され、教員は子どもたちと会える喜びを胸に登園日を迎えた。動画配信を通して、担任の名前と顔を覚え会うことを楽しみにしていた子どもや、杏の実りに関心を持ち探ってみたくと話す子どもの姿があり、園生活への期待に繋がっていたことが窺えた。しかし年少児は家族と過ごす時間が多かったことの影響からか、友達との関わり方が分からなかったり、思い通りにならずに癇癪を起したりといった姿が多く見られた。本来であれば他者との関わりや触れ合いによって成長する部分だが、今年は園生活が始まって、ソーシャルディスタンスやマスクによって思うようにいかずもどかしさを感じた。屋外での活動を増やし密にならずに関わり合える場を設ける等、新しい生活様式での援助の在り方を模索している。

話題提供②

子どもと一緒に『今』を大事にすること

前田満那子(認可保育園 こども芸術大学)

1) 在宅勤務で取り組んだこと -ギターに挑戦-

在宅という新たな仕事環境に当初は戸惑いを感じた。私には保育園に通う4歳の息子がおり、家庭保育に協力し仕事のそばには子どもがいる環境だった。仕事をしようとする息子は「遊んでくれない」と怒りをぶつけ、私もイライラとし決していい環境ではなかった。きっと、在宅勤務で家庭保育をされている保護者や子どもも同じ思いをしているのではないかと思った。他の職員と語らう中で、何か息子と共にできる教材研究として思いついたのが、以前から興味があったギター練習だった。いざ取り組むと、その私の姿に息子が興味を示し、母子一緒にギターを鳴らすことになり、その後は息子にも私にも心地よい時となった。

変化していく状況だからこそ、保育園に来て友達と声を揃えて歌を歌ったり体を揺らしたりして楽しい雰囲気集うトキを持ちたい思いでギターに挑戦した。今までとは違う新しい楽器を手にして、私自身が楽しんで保育することで、子どもに届くことがあると信じて取り組んだ。

緊急事態宣言解除後、初めてクラスの前でギターを弾くと、なんだか照れたようなドキドキワクワク感が子どもから伝わり、再会を喜び合うトキを得た。それから、ギターで歌うことが日常となる中で、子どもから「ギターつくりたい」「ギター弾きたい」という思いがギター作りに展開していき、作ったギターを鳴らしながら歌い楽しむ

姿となった。さらにギターの改良が重ねられている。

2) コロナ禍だからこそ計画した園外保育「楽心荘へ」
私の勤める保育園は京都芸術大学の中にある。当時は、大学も閉鎖されており、どの施設も許可をとれば使用できる環境にあった。

不安な情報や日々落ち着かない環境下で、外出を控え変化を受ける生活の中で、リラックスしてゆったりしたトキを持ちたいと願い、学内施設「楽心荘」に向かう園外保育を計画した。楽心荘は、私自身が学生時代に不思議な空気を味わった場所である。この時だからこそ、子どもにもあの気持ちを感じてほしいと思った。そして、親しんでいる瓜生山(庭)を旅するように、山のお宝(自然物)を集めつつ散策し、初めての楽心荘に出かける旅へと誘った。山を散策するときいつも目にするけれど、まだ入ったことはない楽心荘、その秘密の扉を開けてファンタジーの世界に誘い、月一回のお弁当日でもあるこどもの楽しみな園外保育を緊急時の保育で実現するための案を考えた。私は、どんな環境にあっても子どもと一緒に『今』を大事にすることをコロナ禍の時代に、より強く感じている。

話題提供③

緊急時の保育環境を創造するための管理者の役割

鍋島恵美(認可保育園 とも芸術大学)

1) 職員体制及び在宅勤務について

感染拡大防止及び保育児童数の減少に伴いA・Bに分けて2チーム体制を取り、在宅勤務と保育担当(出勤)とに分かれた職員体制を試行した。在宅勤務では、自己研修とし、その内容は、保育者の主体性を尊重した。主に教材研究や教材作成、保育関係図書の講読などに費やされた。

在宅勤務者の健康状態把握と適切な勤務時間の管理のために、勤務開始、休憩、勤務終了時刻にメールを送信しコミュニケーションを取り合うことに努めた。

2) 適切な保育計画と保育環境について

緊急事態宣言が出されたと同時に家庭保育が可能な家庭を把握しつつ、保育を必要とする児童の年齢と人数が確定していった。その状況下で、1歳児から5歳児までの児童を適切な環境で保育を営む最善の方法について職員と知恵を出し合い協議した。1歳児はすべてが新入園児であり、2、3歳児にも新入園児を迎えている。保育室は、安全安心を期して玄関にも給食室にも近く事務所からも見渡せる乳児クラスの2部屋を使用することにした。乳児が安心して過ごせることを優先した。そして、乳児(1、2歳児)と幼児(3、4、5歳児)とに分けて保育を試みた。2チーム体制を組む時に乳児と幼児の担当保育者が必ずどちらにもいることに配慮した。

保育計画は、乳児と幼児とに分けて活動及び事後記録を詳細に記入し、次のチームにつなぐことを重視した。4月1日に入園、進級して間もなくの緊急事態となり、子どもと心を繋ぎ始めようとしていた矢先、担任としては自分が大事にしていこうとする子どもとの関係を他の保育者にも知っていてほしい。その願いから保育者間で密な連携が必要となった。そのために、事後記録が子ども理解と保育者間の保育観を繋ぐ有効な保育資料になった。

3) 家庭との連携及び子育て支援について

働く保護者にとっても新たなことに立ち向かう中で、保育を必要とする家庭とは、今まで通り情報交換が可能であった。が、家庭保育に協力している70%程度の家庭には、どのように情報発信して連携を取るか思案することになった。在宅勤務の下で子どもがそばにいることは、大変であろうと察することができた。ある保護者からは、SOSが届いた。

管理者の立場から、今回の新たな挑戦が今に繋がっている子どもにとって没頭できる保育環境を提案したい。一方幼稚園においても消毒をするという今までにない作業が組み込まれており、安全な環境という視点から幼保の保育文化が重なっていく兆しを感じていることにも触れたい。

III 指定討論

指定討論①

園と家庭をつなぐ環境教育から見える発達

安見克夫(東京成徳短期大学)

日本の幼児教育は環境教育と言われ、遊びや生活は豊かな環境に対して、子どもが応答的に関わることが求められています。2020年、新型コロナウイルスが急速に拡散され世界的パンデミックを引き起こしました。誰もが経験したことのない分断された社会となりましたが、子どもを中心に各園の環境に合わせて手探りで園と家庭をつなぎ、一つひとつ修復していきました。その取り組みの過程で様々なことが見え、成果が次第に可視化されてきています。園と家庭を懸命につなぎ合わせてきた真の保育者の心に内在する「意気」に触れ、学び合うことこそ、保育者の資質であると考えます。そこで、①つなぎ合わせていく取り組み、②分断された社会の修復に投じた保育者の心、③その過程で見られる子どもの発達、の3点を改めて捉え直す必要があると考えています。このシンポジウムを通して、これらを中心に提案者を交えてフロアーの先生方と意見交換できることを期待したいと思います。

指定討論②

災いの中の状況をいかに跳ね返し

保育のエネルギーに変えていくか

杉山健人(鳴門教育大学附属幼稚園)

新年度早々の休園により、ベストが尽くせない状況が続き、それがジレンマであった。そんな中、子どもが存在しない幼稚園と家庭を結びつける為に、動画配信を行った。見えないものをイメージで共有したり、生活の文脈を繋げたりする。このようなねらいをもって、教育要領の5領域を意識した動画を配信した。バーチャル体験に没頭してしまうことのリスクを超えて提案する価値があると考えた。子どもと実際に手掛けるというベストな方法は無理でも、ベターな方法を追求しようという意識が休園中に深まった。園の様々な環境(財)と、ICT(財)の両方の性質や魅力を探ることで、子どもと園の環境(財)を繋げることができた。保育の価値は、子どもが自分で手掛けたから生まれる、という訳ではないことに気づかされた。

「災いの中の状況をいかに跳ね返し、保育のエネルギーに変えていくか」という視点から、提案者やフロアーの方々と意見交換をしていきたい。